

月例研究会（2016年7月1日）

共催：子どもの労働と貧困プロジェクト

## 母子世帯の口述史からみた 家族と階層

江沢 あや

日本の母子世帯の特徴のひとつは、母の就労率が80%以上と高いことである。にもかかわらず、母子世帯の多くが貧困線未満の収入で生活している。母子世帯の母親はどのようにして家庭と仕事を両立させるのだろうか。また、生活水準の低下に対してどのように対応するのだろうか。そして、母親であることの意識と階層性はいかに関連しているか。

本報告は、1998年から2000年にかけて東京で行った59人の母子世帯の母親の口述史インタビューをもとに、母子世帯の生活意識と階層性について考察したものである。

社会階層とは何か。ピエール・ブルデューによれば、所得や資産といった経済的資源だけではなく、特定の知識や態度、社会的なつながりやコネクションといった文化的資源や社会的資源も重要であり、それらが人々の階層的地位を表し、社会移動にもつながっている。この概念に従うと、母子世帯の母親は、一定の生活水準を保つために収入を得る必要があるだけでなく、自分たちの社会的地位に相応しいライフスタイルや生活態度を子どもに与えなければならない。なぜなら、子どもの学歴や将来キャリアを支えるのは、収入レベルで表される社会階層だけでなく、「正しい」養育スタイルから生まれる文化資本や社会関係資本も、社会階層を構成するからである。

したがって、母子世帯の母親は、限られた資源のなかで、子どもにとって何がベストか（最

も大切な）を考えることが重要となる。子どもを大学に行かせるために、仕事により多くの時間を割いて少しでも高い収入を得るか、子どものしつけや養育に自分がより多くかかわれるよう、子どもとの時間を優先するか、どちらがベストの戦略なのか。

中流階級で大卒学歴を持つ母子世帯の母親は、子どもの学歴や将来キャリアを心配して、子どもを大学に行かせられるように仕事や収入に力を入れていた。中流階級の母親にとっては、専業主婦の理想にそって子どもと過ごす時間を大切にするよりも、子どもの学歴達成を支える仕事や収入が重要であり、他の母子世帯と比べて相対的に高い収入を得ているにもかかわらず、お金がないことを常に不安視していた。

一方、労働者階級出身の母親は、働く母親の苦勞をみて育ってきた人も多く、可能であれば、子どもと一緒に過ごす時間を優先したいという傾向がみられた。実際、彼らが中流階級の母親と同様に子どもに高い教育を与えたいと願っても、彼らの不安定な雇用と低収入では、子どもの大学進学を支えることは現実的に困難である。お金がないことよりも、子どもの頃に憧れた専業主婦の母親のように、子どものそばにすることが良い母親だと考えていた。

このような違いからみえることは、子どもの学歴や将来キャリアのために母親が利用しうる資源や生活状況がいかに異なるかということである。階層的に異なる文化が母親の行動を形作るのではなく、利用しうる資源の違いが子育てに対するアプローチの違いとして現れるのであり、それぞれにベストな生活戦略を考えて行動しているのである。低所得母子世帯に向けられがちな「貧困の文化」論を回避するためには構造的な把握が必要であり、彼女たちが置かれた生活状況を丁寧に理解することが大切である。（えざわ・あや ライデン大学日本学部准教授）